

伊豆市未来づくり 個別セッション

「持続可能な財政フレームと成長戦略」 第2回(2014/9/14 実施) 発言要旨

(敬称略)

座長	静岡産業大学 総合研究所 所長	大坪 檀
有識者	静岡県地域づくりアドバイザー	飯倉 清太
アドバイザー	静岡県経営管理部自治局 自治財政課長	澤野 岳志
市民代表	伊豆市観光協会	長谷川 卓
	伊豆市商工会	金刺 厚史
	NPO サプライズ	森嶋 康代
	伊豆市議会議員	小長谷 順二
	行政改革推進委員	浅田 郁雄

【ゲスト 大妻女子大学家政学部ライフデザイン学科】

伊豆市連携プロジェクト	土肥チーム	石谷 春香	武藤 成美、
	天城チーム	秋山いくみ	毛利 友美

市長 ○皆さん、こんにちは。3連休の真ん中の日曜日にお集まりいただき感謝します。私にとっては4月6日に放映されたNHK朝7時のニュース「おはよう日本」ショックがある。取材内容は若い女性が減少する、人口が減少する伊豆市だった。私から記者に「8歳以下の子どもは増えている」と話そうとしたところ記者から「その話は結構です」と遮られた。「衰退し続ける伊豆市」にニュースバリューがあるという。これに対して4-5年後にNHKニュースで「あの伊豆市が今は元気になりつつある」と報道されること、これが伊豆市の行政改革の成果であろうと私は考えている。反転攻勢のために本日は大妻女子大学の皆さんに来ていただいてアイデアを頂戴する。よろしくお願ひしたい。

司会 ○大妻女子大学の皆さんには8月上旬に伊豆市のインターンシップ事業の一環として実施した「大妻女子大学 伊豆市プロジェクト」で提案発表された内容をもとに、観光地の活性化等についてご説明いただく。その後、セッションに移る流れで本日は進めていきたい。

< 発表 >

○「大妻女子大学・伊豆市連携プロジェクト」として、土肥と天城のチームに分かれて観光客増加のための提案をさせていただいた。本日はその内容を土肥と天城のそれぞれで発表したい。

< 土肥チーム >

○土肥チームは2日間で、土肥特産市「ありがとう」や恋人岬を訪れ、駿河湾フェリーに乗って土肥金山に行って、とろろん創作料理体験をした。各観光地で観光客に対してアンケートを実施し、話を伺うなどした。



○それぞれの観光スポットを回って気づいたことは、ターゲットとなる観光客層がバラバラで一貫性がないことである。各観光地のターゲット層が異なっているので土肥としての一体感がない。曖昧なまま万人受けを狙うと他の観光地との差別化が図れず、土肥の強みがうまく出せない。観光地で販売する土産物を考えるにしても開催するイベントを企画するにしてもターゲットを明確にすることが必要だ。土肥という魅力的な観光地を訪れてもらって土肥でいろいろな観光スポットを回ってもらうために、ターゲットを絞ることを

をまず提案する。そして単にターゲットを絞って終わりにするのではなく、ターゲットに合わせた雰囲気づくりやモノづくりを進めることが大切である。

○わかりやすくするために一例として「カップル」をターゲットに絞った場合の具体案を示したい。カップルをターゲットにした場合は、まずイベント企画が重要である。誕生日ではケーキを用意する、クリスマスではツリーやイルミネーションをきれいに飾る、年越しでは2人で一緒に鐘を鳴らせるようにする、バレンタインデーやホワイトデーでは食事や植物、イルミネーションなどにハートの形をあしらう、カップルが楽しめるイベントをつくることである。それぞれのイベントによって雰囲気が異なるので、次回も訪れてもらえることも期待できる。

○次が撮影スポットを設定することである。海、山、夕陽、植物、ほかではあまり撮ることができない自然、訪れた場所がわかる看板、地域の特産物も含めて観光地ならではの特別な撮影スポットがあれば観光の思い出にもなり2人の思い出にもなる。私たちが考えるカップルが求めるものには、思い出、写真、美味しいもの、清潔さ、限定、体験、2人で座れる場所がある。カップルは2人で訪れた記念としてたくさんの写真を撮影する。美味しいものも、そこにしかない珍しいものも、何気ないものも撮りたくなる。2人でさまざまな体験をすることも楽しいが、それを残したいと考える。カップルをターゲットした場合は先に指摘した「写真」がキーワードになる。カップルは幸せアピールしたいので撮影した写真をツイッターやフェイスブック、写真を載せるアプリなどのSNSに載せたがる。こうした写真による宣伝効果も期待できる。

○以上を踏まえた上で私たちが訪れた観光スポットをとりあげて具体的な提案を示したい。第一に恋人岬では、1つ目が2人の記念になる撮影スポットを設置する、2つ目が2人の名前が書かれた鍵をかける場所をスタート地点からゴール地点に変更することで、これによって鐘だけではなく鍵をかける目的もあって厳しい道も頑張って歩いていく人が増える。3つ目がイベントに合わせてキャンドルを置いてカップルが楽しめるロマンチックな雰囲気を演出することで、これらを提案したい。第二に駿河湾フェリーでは、カップルは2人の時間や空間を大切にしたいと思うので、ペアシートを多く設置することをまず提案したい。夕陽に合わせて出航すれば夕陽を目的に乗船する人もでてくる。そして乗船時間を長くして船内でディナーを提供するなどすれば単なる移動時間から思い出づくりの時間にもなる。

○以上をまとめると、ターゲットをカップルにした場合は、恋人岬では仕組みを変えて楽しい場所にする、駿河湾フェリーでは思い出づくり優先の乗船時間にする、こうした提案ができる。ここでターゲットとして検討したカップルはあくまで一例で、最も強く指摘したいのは「ターゲットを統一することである。土肥の観光を活性化するために、ターゲットを絞って、そのターゲットに合わせた雰囲気やイベントづくり、これを提案したい。以上で土肥チームの発表を終了する。

<天城チーム>

○天城地区では、水恋鳥広場、旧天城トンネル、浄蓮の滝などの観光スポットを巡った。それぞれの観光場所で感じたことは、看板や売店などさまざまな取り組みをしているにもかかわらず、良い観光資源になる要素を十分に活かしきれていないことだった。活かしきれていない原因としてPR方法が弱いことがある。これを踏まえて天城地区に提案したいのは、一つがイズシカ料理をブランド化してご当地料理として確立する、もう一つがジオパークを子ども向けに提案する、この2点である。



○イズシカ肉では、シカ肉を食べた経験がない学生が過半数だったことやシカ肉が自体が珍しく東京では食べる機会がなく馴染みが薄い点が指摘できる。さらにシカ肉料理に関して全国で調べてみると、シカ肉料理を扱っていてもそれをご当地料理や名産として確立できている県は見当たらなかった。このことから、イズシカ料理を「伊豆＝シカ」としてご当地料理として観光開発できるのではないかと提案する。ただ、現在のイズシカ料理の売り出し方ではご当地料理とはなるのは難しいように思う。イズシカのパンフ

レットをみればわかるように、ロコモコやスペイン料理、多国籍料理など料理のジャンルがバラバラで単にシカ肉を使っているだけで料理に統一性がなく、ただのシカ肉料理に留まっている。ここで私たちはご当地料理を確立している他県を分析した。ご当地料理を成功させる要因について共通点を示すと、まず地元民の日常食として愛されているという特徴がある。そして、さまざまな食べ方が工夫されている、各店舗によって独自の味があってそのことで店舗数が多くなる、店舗数の増加でライバル店が多くなる、ライバル店の存在が品質向上につながる、品質向上によって知名度が上がり全国展開に拡大する、全国展開が宣伝効果として働く、そしてこれがさまざまな食べ方を工夫することにつながっている。全国チェーン展開されることで現地の味を知りたくって、現地を訪れることになって旅客数の増加につながる。

○次にもう一つの提案であるジオパークについて説明する。私たちが実際にジオパークを体験して感じたことはジオを五感で感じることができるのでとても楽しいことであった。水恋鳥広場で行ったアンケートからわかったのは「ジオパーク」という言葉は大人よりも小学生などの子どもに浸透していることである。この2点からターゲットを子どもに絞るよう提案したい。具体的には自由研究テーマにジオパークを取り上げてもらうことができれば観光客の増加につながるのではないかと考える。ここでも現在の方法では十分ではなく宣伝不足といえる。ディスプレイの方法を変える、パンフレットを配布する、旅客数の多い浄蓮の滝での宣伝をさらに活発に行う、こうした改善案ができる。具体策としては、子ども達を集めた「学者体験ツアー」を提案したい。ジオの学者体験ツアーでは、ジオツーリズムを実際に五感で感じることができる、地域の気候や歴史がその地域のジオパークに関係していることがわかる、景色や音、土や石の感触を実際に体験することで子ども達の興味を引く、こうした要点があるといえる。

○以上をまとめると、私たちが天城地区で感じたことは、実際に食べてみるとシカ肉料理に対する印象が変わること、ジオパークは一見地味だが体験したり触れてみたりするととても面白いことだった。天城地区はよい観光資源を持っているので売り出し方を変えるよう提案したい。よい観光資

源をよい売り出し方に変えることで観光客増加につながるのではないかと考える。
以上で天城地区と伊豆市連携プロジェクトの発表を終了する。ご清聴、ありがとうございました。



座長 ○まず、ここまでの学生の発表に対して質問やコメントがあればお願いしたい。

飯倉(有識者・静岡県地域づくりアドバイザー) ○発表、ありがとうございました。土肥と天城について調べてもらって、ディスプレイ方法が足りないという指摘だったが、それは統一したデザインにする方がいいのか、違う方がいいのか、どちらか。また、シカ肉料理が伊豆市の名物のなるときに皆さんご自身が東京から彼氏と来て食べる気になるか、この2点について伺いたい。

毛利(大妻女子大) ○ディスプレイについては、ジオパークでは浄蓮の滝に柱状節理があるのに、これについて現地で説明する場所がまったくなかった。私たちはその前に昭和の森でジオについて教えてもらっていたのでそこにあることが確認できたが、浄蓮の滝にはじめて来た人でそれを見て柱状節理だと分かる人はほとんどいないと思う。ジオパークに関係する場所ではジオについての説明がある方がいい。

秋山(大妻女子大) ○シカ肉については、個人的な感想だが、女子大生の視点で知名度が上がることを考えると、有名な芸能人が紹介したり、雑誌などで取り上げられるくらいのレベルになればシカ肉を食べに伊豆市に行きたくなると思う。

座長 ○金刺さん、コメントがあれば。。

金刺(伊豆市商工会) ○イズシカ肉については広報などで耳にはしていたが、指摘されたように地元民の日常食にはなっていないと思う。私自身も何回かは食べたことがあるが、日常食という

レベルにはまだまだ達していない。PR について考えても地元から発信するには市民がある程度日常的に食べていて、このように食べたら美味しい、こんな風に料理するといい、といった提案ができることが必要だろう。現時点では飲食店のプロの料理人の料理はあるものの、地元ではこうした食べ方がポピュラーだといえるほどになることだ。PR 方法が上手くないという指摘は要点をついている。皆で考えていかななくてはならない課題だ。

○土肥についてカップル目線で恋人岬にポイントを絞った場合はどのような印象だったか。あるいは土肥でなくても修善寺界隈でもいいのか感想を伺いたい。

石谷(大妻女子大) ○私は今回はじめて土肥に行ったが、想像していたところとはずいぶん違っていた。恋人岬では、まず人が少ないという感想を持った。飲食店に入ると狭くてモノが多かった。何をテーマにした観光設備なのか、統一性もなく、理解できなかった。

金刺 ○皆さんは生まれてはじめて伊豆に来たのか。それとも小学生や子どもの頃などにも来たことがあるか。はじめて来たのであれば、伊豆に実際に来てみて自分が持っていたイメージとの間にギャップはあったか。

石谷 ○私は家族とともに修善寺を訪れたことがある。その時には足湯がきれいで、温泉地に来たなあという印象を受けた。

武藤(大妻女子大) ○私は今回はじめて伊豆に来た。印象としては恋人岬にはもう少し清潔感が欲しいと思った。たとえば、恋人岬で鐘に向かって歩いていくと休憩場所があってテーブルと椅子が置いてあるが、草が生えていてとても休憩できる場所ではなかった。そのほか、使えそうもない大きなパイプのようなものが道端に置いてあった。もう少し清潔であった方がいいと思う。



秋山 ○私は伊豆市のこのプロジェクトではじめて伊豆に来た。私は天城に行ったが、私が持っていた伊豆のイメージは温泉街だったので、天城はそれとはかけ離れていた。自然は多いが自然であれば別に伊豆でなくても他にもあるし、あまり魅力的なところがなかったので、私自身が観光で天城に行くことはないと思う。まだ土肥の方が、フェリーも気になるし、恋人目線なので大学生が気軽に行けるという印象だった。

毛利 ○私は祖父母の家が伊豆に近いので、これまでも伊豆には何度か来ている。ただ、観光地だから来るというよりは近いから来るという感じで、実際、何か思い出を作ることはなかった。今回提案したように観光地に統一性がないので何を思い出にすればいいのか、何を目的とすればいいのか、と聞かれると答えにくい。統一性がないので観光に来ようという気が起きないといえるかもしれない。

座長 ○長谷川さん、観光協会あるいは旅館業の立場から何かあるか。

長谷川(伊豆市観光協会) ○今日は発表をありがとう。発表内容とは異なるが、今回どのような交通手段で伊豆市に来たか、また伊豆市滞在中の移動はどうだったか。

毛利 ○8月2日～5日に滞在した時には、往きは新宿からの高速バス、帰りは新幹線だった。滞在中は市役所の方が送迎してくれた。

長谷川 ○それでは、自分たちが個人で来る場合にはどういった交通手段がいいと思うか。

毛利 ○今回は送迎があったので太郎杉にも行くことができたが、はじめて来たと考え、この道を自分の車やレンタカーで走れるか、この場所に自分で行きつけるか、心配がある。水恋鳥広場も道路から直接見えるわけではなく登り坂だったので、実際来たとしてもここが水恋鳥広場だとわかるのに時間がかかるだろうし、迷ってしまうのではないかと感じた。

長谷川 ○新宿からの高速バスの値段は、片道 2570 円、往復 4600 円だが、これをどのように感じるか。新幹線だと三島まで約 4500 円、三島から伊豆箱根鉄道を使うと修善寺駅まで合計で 5000 円ほどかかる。修善寺駅から移動するとなると、さらにお金がかかる。学生が遊びにくる観光地としてはどうか。

秋山 ○新幹線だと少し高い印象があるが、高速バスの 2600 円は安い、往復だとかなり安いと思う。ただ、ところが伊豆に遊びにきた友人に聞いたところ、レンタカーを借りた人が多くて、バスや電車を使った人を私は聞いていない。



長谷川 ○伊豆に行くとき友達に聞いた時には、伊豆のどのあたりに来るイメージなのか。海のあるところか、山の中なのか、一般にどのように考えるか。

秋山 ○伊豆はやはり海のイメージが強い。

長谷川 ○土肥に行くにも車があればさほど問題はないのだが、電車で来ると修善寺駅からバスで土肥に行くことになるが便数もあまり多くない。伊豆に行くというイメージで、土肥や西海岸に行くことまで想像できるか。また修善寺駅はすぐに思いつくのか、あるいはあまり思いつかないか。

座長 ○伊豆で思いつくのは何か、思いつく場所はどこか。

秋山 ○伊豆で私が思いつくのは、温泉と海。特に思いつく場所はない。

武藤 ○私は魚介類を想像する。地名として知っているのは伊豆くらい。

座長 ○伊豆半島といえばどうか。伊豆と伊豆半島は同じようなものか。

石谷 ○私は、さきほども話したように修善寺に来たことがあるので、修善寺しか知らなかった。

座長 ○ありがとうございました。伊豆半島というと海と山というイメージはあっても、地名まではなかなか出てこないようだ。この点は問題かもしれない。

浅田(行政改革推進委員) ○先ほど伊豆に来たら海というイメージがあるとのことだったので一度は海に出たいと思うか。土肥から海に出れば富士山が見える。海側から富士山を見たいと思うことはあるか。

毛利 ○私自身では海から富士山が見えるということまでは思い浮かばない。ツアーなどで海から富士山が眺められるという宣伝文句があれば行ってみようかなとは思いますが。。。

浅田 ○これからの季節、11月までは特に富士がきれいに見える。これからは海の向こうに見える富士山、海に出て富士山や伊豆半島の風景を見る、こうした点を宣伝することはできる。

森嶋(NPO サプライズ) ○本日は私たちが気の付かないことを指摘してもらった。そこで皆さんが旅行に行くときに決め手となるものは何か、教えていただきたい。

毛利 ○私はまず美味しいものを食べられる、宿泊施設がきれいできちんとしている、その土地ならではの楽しめるものがある、こうしたことを重視している。その土地ならではのというのは、たとえば東京ディズニーランドや大阪のユニバーサル・スタジオといった遊園地であったり、その土地でしか食べることができない見ることができないもので、こうした点が旅行先を決める決め手になる。



小長谷(市議会議員) ○市長からも宿題を出されているので少し質問させていただく。恋人岬や駿河湾にカーフェリーがあることを以前から知っていたか。

女子大生3人 ○今回、はじめて知った。

毛利 ○私は地名だけは知っていたが、場所は知らなかったし、実際に行ったことはなかった。

小長谷 ○30年ほど前、学生時代に私が東京に住んでいた頃には、食堂などに入ると静岡県の伊豆といえば、ほとんどの人が知っていた。熱海がブームになっていたし、当時、伊豆は庶民にとってちょうどいい旅行先だったことがその理由だったように思う。以前は伊豆は知名度が高かったのに、今の若い人は知らないことがわかって、いささかショックだった。恋人岬は30年ほど前に整備されたが、少女マンガ雑誌のマーガレットの中のホットロードというコーナーで紹介されたことを

きっかけに若い女性が恋人岬を知り訪れてくれるようになってブームになったと聞いている。非常に難しい問題だが、どうやって周知していくか、これが宿題だと感じている。

○伊豆のイメージで湧くのは、海か、山か、あるいは名前を知っているといった程度か。

毛利 ○私は何度か来ているので、伊豆のイメージは、自然が豊かであることと、のどかであるということ。

小長谷 ○そうすると我々迎える方がそうした現実を知っていないといけないということになるだろう。(若い人にあまり知られていないことを)理解せずに一生懸命やってもダメなので、もう一度原点に戻って考え直す必要があるかもしれない。

澤野(静岡県経営管理部) ○差し障りのない範囲でお答えください。今は大妻女子大に通っているが、ご自身の住まいはどちらか。また、もともと、どちらの出身か。生まれ育った町と、土肥や天城など伊豆市で回ったところを比べて、“観光で訪れる場所”ではなく、“住む場所”として伊豆市についてはどのような印象をお持ちか。

毛利 ○私は静岡県沼津の生まれだが、父親の転勤で各地を転々としたので生まれは沼津であっても出身地が沼津であるとはいえない。こうした背景もあって土地に対する執着感はない。今回いろいろな場所に連れて行ってもらって感じたのは、伊豆では土地の人達のつながりが強く、互いに気軽に挨拶を交わすことだった。このような場所で育ったら、心のあたたかい人、人とのつながりを大事にする人に育つのではないかというイメージを抱いた。

秋山 ○私は出身も今の住まいも千葉県。毛利さんと同じように伊豆では地域のつながりが強いと感じた。千葉ではマンション住まいで、近所の人と触れ合う機会は少なく、エレベーターのところで軽く会釈をする程度の希薄な関係しかなく、淋しい気持ちもある。伊豆に来て水恋鳥広場などで地域の人が頑張っている姿をみて「こういうのはいいなあ」と感じた。

武藤 ○私は生まれも現在の住まいも千葉県千葉市。千葉市は建物が多くて自然がない。あっても伊豆市と比べると自然とはいえない程度のものでしかない。千葉市では地域の人とのつながりはほとんどなく、町内で掃除をする程度で顔を合わせても誰だかわからない。伊豆市に来て感じたのは、市内で違うところに住んでいても顔見知りで、つながりがあって、あたたかい関係がある。これは羨ましいと思う。

石谷 ○ほかの3人と違って、私は個人的には地域の人間関係はあまり重視しない。私は出身も今の住まいも神奈川県で、家の周りはショッピング・モールも充実していて高層マンションも建ち始めているものの、緑も取り入れられていて買い物も手軽にでき、とても住みやすい街になっている。伊豆市には緑はあるかもしれないが、商業施設があまりないように思う。私が若いからかもしれないが、買い物がすぐにできるような街の方がいい。



座長 ○ありがとうございました。休憩前の最後に私からも質問させていただく。これから 1-2 年のうちに観光旅行をするとしたらどこに行ってみたいか。

毛利 ○私は、高知県、北海道、長崎に行ってみたい。

秋山 ○京都と福岡。。。。

武藤 ○美味しいものがあるところで、北海道と福岡県。

石谷 ○私も北海道に行きたい。冬の寒い時を体験してみたい。

座長 ○女子大生の意見は大いに参考になったと思う。観光の焦点がぼけているとの指摘だった。確かにターゲットがはっきりしない、何のために観光をするのか、目的がはっきりしないのは、伊豆だけではなく日本の観光地が抱える問題であるといえる。恋人岬について静岡県民は知っていてもターゲットが明確でないために他県の人には認知されていないように思う。強みの観点から参考になる発言をしていただいた。ありがとうございました。

< 休憩 >

座長 ○大妻女子大の学生さんからの有意義な提案を受けて、次に委員を中心に議論を進めていきたい。このセッションのテーマは「持続可能な財政フレームと成長戦略」で、手元に配布された「テーマ検討シート」では財政フレームと成長戦略の 2 つの観点に分けて論点を示している。前回セッションの冒頭で私が提案したのは 13 億円を皆でなんとかして確保しようという成長戦略だったが、財政フレームと成長戦略は両方が関係するものなので、両面からの発言をお願いしたい。前回のディスカッションを踏まえて、まず飯倉さん、いかがか。

飯倉 ○「テーマ検討シート」を拝見したが、このセッションのテーマに関連して前回話したクラウド・ファンディングがある。その中で今日も会場になかなか人が集まらないことから考えると、伊豆市がこれから進めようとしていることが市民にとって「他人ごと」なのではないかと痛感する。まずこれを「自分のこと」にしなければならぬ。そのための事例として全国でさまざまな取組がされていて、稼ぐインフラの形で市町村が進めているものもある。岩手県紫波町では民間で造ったスポーツ施設を公募で買い取るしくみを作っている。

○近隣では下田市にあった旧南豆製氷所という素晴らしい歴史的建造物は取り壊されてしまったが、この下田の一等地にある製氷所跡地に市民ファンドを活用して商業施設などを作ろうとする動きがある。全資金の 60% についてファンドを通じて資金調達する。調達予定額は 3,000 万円、1 口 3 万円で最大 33 口、計 99 万円まで 1 人が投資できる。ファンドは 5 年で償還されるが、分配金のシミュレーションとして 125% を目指すという。

○インフラ整備も必要になるが、Googleのように直接客からお金を集めないフリー・ビジネスのしくみもあるとはいっても、行政組織であっても稼いでもいいセクションを1つくらい作るのもいいのではないか。紫波町は人口3万3千人だが、全国から視察が毎日のように訪れているほどで、こうした手法を伊豆市としても勉強した方がいい。

* 伊豆新聞 「下田・南豆製氷所跡地に商業施設建設 レストラン、市場... 来春完成へ」
<http://izu-np.co.jp/shimoda/news/20140828iz100000126000c.html2>

* 伊豆下田 南豆ヴィレッジファンド <http://www.musicsecurities.com/communityfund/details.php?st=a&fid=663>

小長谷 ○飯倉さんからクラウド・ファンディングの話がでたので、現在、土肥地区で進めようとしている取組を紹介する。ポランツーリズムとしてインターネット上で寄付を募集して12万円を集める目標で、この目標額は達成した。これを受けて次に実施しようとしているのが、土肥名産の白びわのせん定作業をして、その後おいしい食事を皆で取って温泉に入るという企画だ。こうした企画提案を進めながら、少しずつ土肥の知名度を上げようという活動である。地元農家と共同で企画して、提携した東京農大の学生に土肥まで来てもらって作業をしてもらって、東京農大の学園祭で白びわ茶を販売する。土肥でこうした取組を始めていることをまず紹介したい。

* 『幻の白びわ』で地元農家とつながる！新しい形、ポランツーリズム <https://faavo.jp/shizuoka/project/247>

浅田 ○前回セッションでは都市計画の見直しに関連して固定資産税について私から提案し、その後、市長からコンパクト・シティ、伊豆市の場合はコンパクト・タウンを造っていききたいという話が出された。タウンを造っていくにあたっては人に住んでもらわなくてはならないが、特に子育て世代を重視してはどうか。行政の負担は大きくなるが、伊豆市の成長をまちづくりと財政の両面から考えた時に子育て支援が重要だ。子育て世代が増えれば、人口増加、交付税収の増加、施設整備や職員の増加などが見込まれ、子どもの成長に合わせた消費も増える。



○私が考える子育て支援案は、伊豆市で現在進めている出産準備手当や不妊不育治療医療費助成等子育て前の支援事業の充実、新婚、子育て世代のための事業を充実させることである。若者定住促進補助金事業を現在80戸と聞いているが、これからも引き続き強化してまちづくりを進める、土地探しや建物を建設する時に物件情報だけでなく地域の情報も提供することを提案したい。このほか伊豆市独自の新婚子育て世帯向けの賃貸住宅支援も提案したい。若者定住促進補助金では現在は住宅建設1戸に対して最大100万円を補助しているが、これを賃貸の家賃に置き換えて1か月あたり1万円、年間12万円の住宅費補助により民間賃貸住宅を借りることを推奨する。対象戸数を最初から30戸くらいに広げて実施すると当初予算が年間360万円、補助期間を7年にすれば事業費の総枠は2,520万円になり、行政効果は十分発揮されるだろう。5

年毎の国勢調査時に人口が確定することから7年という期間を想定したが、短期的な行政手法としても検討できる。

○子どものための費用助成はもとより保育や児童クラブなどで父親や母親の働き方にあった送迎ができる環境を整備することも提案したい。こども園あゆのさとは、当初は学区外からも通園できたが、昨年の地区懇談会で学区内で通園できない幼児がいて不便だという問題が指摘されていた。行政的には定員があるので難しい問題でもあるが、熊坂保育園と修善寺東保育園をネットワーク化して園児の登園と退園はあゆのさで行い、あゆのさから熊坂保育園や修善寺東保育園に園児を移動する方法を導入するのはどうか。すでにこのような保育園間での送迎を実施している自治体もある。

○子育て支援が充実すれば伊豆市が成長できると私は考えている。今回考えてきた提案の1つとして、まず子育て世代支援の充実策として提案したい。

森嶋 ○浅田さんが子育て支援について提案してくれたが、私自身も5歳の子どもの子育て中である。伊豆市の財政フレームから考えると、市の産業で財政を支えているのは観光業である。市内の求人についてハローワークなどで詳しく見ていくと、人手が足りないのは観光と介護の職場であることがわかる。2つ業種は若い力が欲しい産業だが、観光では土日祝日に人手が必要で、介護では年中無休だ。それに対して保育や学童保育が追いついていないことが問題だ。土日祝日に多くの人手が欲しいのに小さい子どもがいる母親は保育先が確保できないために働きにできない、こうしたミスマッチが起きている。すべての保育園で実施するのは難しいとしても、一部でいいので、土日祝日の保育や学童を実施することはできないか。働きたい母親はいるのに、子どもを持つ若い母親世代が観光業などで働けない実態があるので、人手が欲しいこれらの産業で子育て世代の母親が働ける方策を検討するよう提案したい。

長谷川 ○市内の旅館に宿泊するお客様から現在1人あたり150円の入湯税をいただいている。この収入は観光目的税として活用されていて、約半分が伊豆市の管理のもとで地域の観光協会に予算として配分されて観光事業に使われており、残りが市の観光事業に役立てられている。全国の温泉地の中には、この入湯税をたとえば50円余分に集めて、それを観光協会などが直接管理して街並み整備基金などに充てているところもある。こうした仕組みを作ることができないかという話がかねてからある。修善寺の温泉場にも少しお金をかけて手をかけて改善していけば統一感ある小綺麗な環境にできるところが何か所もある。一気に無理でも、徐々に行動を進めていかなければならない。将来構想を持った街並みプランは修善寺ではかなり前から描かれていて、それが町内の共通認識になっている。それに向けて行動を起こさなければ何も始まらないが、お金がないために進められない現実問題もある。街並み整備を進めるにあたって、温泉に宿泊してくれた人からの寄付を有効に使う、用途を明確にして説明するといった必要なルールを定めて、透明性ある運営をする基金にできれば一歩ずつ進められ、5年後10年後には見違えるような街並みに整備されるのではないかと考えている。こうしたしくみについては伊豆市ではこれまで話だけで終わってしまっていたが、実際に実行している温泉地もある。市と相談しながら進めていきたいと考えている。

金刺 ○第1回のセッションでも指摘したが、検討シートにもあるように、まずは「合併後10年間の

総括と評価」が大事だと考えている。繰り返しになるが、このセッションに参加するにあたって、それまでほとんど見たことがなかった伊豆市のホームページを読んだ。そこには「第一次伊豆市総合計画 後期基本計画(後期計画)」がある。これは 2011~2015 年の計画なので今まさに進行中で、残りあと1年と少しの間の計画にあたる。計画のダイジェスト版にも今日配布された検討シートで示された成長戦略の内容が概ね網羅されている。後期計画であげられた5つの重点プロジェクトには、成長戦略、住環境整備、次世代育成、まちづくり人材育成、観光交流の各プロジェクトがある。この後期計画が、2015 年までに、どの程度達成できているのか。達成できていないとすれば、どこの部分が達成できていないのか。今回、市制 10 周年の「持続可能な財政フレームと成長戦略」のテーマのもとで今後 10 年間の計画を考えていくために「検討シート」に成長戦略として各論が並んでいるが、現在進行中の後期計画で何が達成されたか、達成できていないとすれば何が問題か、それを達成するにはどういった手立てがあるのか、こうした点についてしっかりとまず総括すべきだろう。総括することで良い案が出てくるはずだ。財政フレームと成長戦略の話だけで進めていったのでは、後期計画から離れてしまうのではないか。



○大人がダメを繰り返しているだけでは若い人が流出していってしまうし、ダメを繰り返しているだけでは何も変わらない。成長戦略を考える時に、現在の計画がどのくらい達成できているか、たとえば 85%くらい達成しているとしたら残りの 15%はどのようにすれば達成できるのか、こうした考え方を持って明るいきざしをみんなで作っていく、こうした姿勢も重要だと考える。

座長 ○総括に対する前向きな発言だった。私は、静岡県の総合計画や、藤枝市や磐田市などの総合計画の策定にも携わったが、良い計画を作っても実行が伴わないことが多い。私は実際に何を進めていくか、これが問われていると考えていて、それを知るために総括が必要だ。前回指摘されたように 13 億円創出しなければならないという前提に立って、これまでの総合計画について市長に簡単に説明をお願いしたい。

市長 ○データを見ながら聞いてきたが、伊豆市の出生数は、平成 21 年以降、ずっと 200 人を下回っている。この 200 人のラインに私はこだわっているが、平成 21 年以降毎年この 200 人規模に到達できていない。市の定住促進の観点から検証しているのが、伊豆市から転出した人が戻ってくるかどうかだ。千葉市で生まれ育った人が伊豆市に移り住むことはかなり難しいかもしれないが、伊豆市で生まれた人が戻ってくるようにすればいいのではないか。

○私が 1 学年 200 人にこだわる理由は小学校の規模とも関係するからだ。1 学年の子どもの数では、土肥では 24 人が理想だがまず 20 人を確保し、天城湯ヶ島と中伊豆では 40~48 人、修善寺では 84 人程度と見込んでいて、このくらいの数の子どもが毎年生まれれば伊豆市合計で 200 人ほどになる。これを小学校のクラスでみると、土肥が 1 クラスを維持できる人数、湯ヶ島と中伊豆では 2 クラス、修善寺が 3~4 クラスで、それぞれ学校の先生が教えやすいクラス規模が確保できる。土肥であれば現時点から 9 人ほど増やさなければならないが、地区別で見ると、土肥の中心部で 4 人、八木沢で 3 人、小下田と小土肥でそれぞれ 1 人増えればいい計算になる。修善寺では最も子どもが少なかった平成 24 年の出生数が 70 人だったことから、あと 14 人増やしたい。駅前周辺

や温泉場で 14 人増やすことができないか、と考えている。地区ごとに産業、住宅、交通、教育などについて精査しなおして各学年の子どもの数を細かく見ていった上で、地区ごとに丁寧な目標設定を考えていきたい。

座長 ○市長の話で参考になるのが、マクロで見てもわかりにくいものが、個別にみていくと達成できそうな目標設定ができるという点である。大きい目標だと案外できない。各分野でたとえば観光協会や商工会がそれぞれ決意表明して、細かく分けて各グループで一つずつの目標を設定して実行に移していけば実現できることがある。こうした考え方をすればいいのではないか。それぞれの人が役割分担を決め目標を決めて、一つずつ頑張ればできることがたくさんある。こうした考え方をもとに何年計画で進めていけば達成できる。アドバイザーでお越しいただいている澤野さん、いかがか。

澤野 ○「テーマ検討シート」の上部にある「目指すべき姿(キーワード)」が今の時点では空欄になっている。財政フレームでの対応や成長戦略はこの目指すべき姿を実現するための手段となるので、伊豆市をどういったまちにしたいのか、市民の皆さんで目指すべき姿をできるだけ具体的に目標というかたちで掲げていって、それを財政フレームへの対応や成長戦略に落とし込んでいく、こうした方向性で進める方がわかりやすい。先に戦略ありきでは目標と手段がごちゃごちゃになってしまって市民にはわかりづらいのではないかと私は思う。

○先ほど金刺さんが指摘されたように検証することも重要。日本全国で人口減少問題と地方創生が大々的に謳われ、それを県レベルでも市町村レベルでもどんどん取組が始められている今、これらの問題は伊豆市だけのものではない。これまで何回も出てきたが、ほかの市町と比べて伊豆市の強みは具体的に何か、反対に弱みは何か。強みをどうやってもっと強くするか、それとともに弱みをどうやって補完していくか、さらにそれを強みに持っていけるのか。こうした検証のプロセスが戦略を考える上で必要なのではないかと考える。

飯倉 ○10年後の伊豆市の姿を設計するという助言をもとに考えると、私は短期的な目標と中長期的な目標が必要だと考える。短期的には住民がもっと関われるしくみを作っていくことだ。10年前から行ってきたことが今活きているか、その検証も含めて行わなければならないし、大人が笑っていないと子どもは元気にならないが、10年後には今の小学6年生が22歳になるので、たとえば伊豆市では中学に進学したら全生徒に「伊豆市学生観光大使」の名刺を市から配布するのはどうか。人口減少では、行かないと言っても他へ行ってしまふことは避けられないので、伊豆市で育った人が行った先々でその名刺を渡して伊豆市を宣伝する、東京や神奈川の大学で自分の同級生に名刺を渡して仲間うちで伊豆市の話すれば伊豆市を訪れようとするようになるかもしれない。観光や全国の地域愛調査では北海道と沖縄が常に1、2位なので、今の伊豆市の小中高校生にもっと伊豆市を好きになってもらう、これが重要ではないか。今からこうした取組を中長期的に進めて、伊豆市の強みを高める機会を意識して作っていくことだ。そうしないと10年後も何も変わっていない、このくらいの人しか残っていないという状況になりかねない。澤野さんが指摘したように今の強みを検証



しながらも、これから強みを作っていく、これが近道なのではないかと考えている。

座長 ○私から一つ提案したいのは、今の伊豆市民はどういったまちになってほしいのか、それを絵にかいて可視化してイメージ化すれば住民にはわかりやすい。修善寺温泉ではそういったイメージを持っているか。

長谷川 ○修善寺温泉ではそういったイメージはかなり以前からあって、それに向かって街は徐々に変化してきている。温泉区の住民の共通意識は、昔ながらの情緒を取り戻す、この方向にあって、この点はできている。行動を進めつつあるがピッチをもう少し上げたい。

座長 ○このほかに意識改革も必要でこれが最も難しいイノベーションで、何を共通意識として持つかが重要である。汚かったことから以前に狩野川清掃キャンペーンを実施したことがあったが、キャンペーンを進めたことで住民の意識が高まった。外国から人が来ると日本の街はきれいでゴミが落ちていないことに感心する。行政がこういった意識に住民を変えていきたいか、これも重要だ。

○私は大きな成長戦略は教育だと考えているが、子どもの教育に最も影響するのは親と家庭だ。静岡県の学力調査で問題になった国語力は観光に直接関係する能力だといえる。教育を伊豆市の強みにできないか。

飯倉 ○教育に関しては長泉町が医療系の高等教育で全国的に有名だが、伊豆市が静岡県 35 市町の中で、何でトップを取るのかを考えれば教育がねらい目だろう。学童保育や児童クラブを統合して、そこで勉強を教えて学習塾のような機能を果たすことでベーシック・インカム(最低限所得保障)を教育面で補助していく方法もあるかもしれない。この周辺では葦山高校や三島北高校もあるし、定年後の先生や寺子屋をやってみたいという高学歴の方などが移住してくれて先生を買って出してくれれば、コストを抑えながらも実現できるのではないか。

○先ほど学生の皆さんからターゲットが不明確だという指摘があったが、まさにそのとおりで日本の観光地はターゲットを絞りきれないという問題を抱えているところが多い。全国で見ると趣味が 3 万件以上もあるように人々の嗜好が多様化してきおり、同じ 20 代の女性であっても 20 歳と 29 歳では志向性がまったく異なる。志向論で考えるよりは新しいターゲットを作る、この考えの方が効果があるのではないか。実際に進められている取組として「東北 食べる通信」という食べもの付きの情報誌がある。女性誌でも雑誌を買うとポーチなどがついてくるものがあるが、それと同じようにこの情報誌を買うと、たとえばカキやホタテ、だだちゃ豆といった食材が付録でついてくる。この情報誌は定期購読でしか提供されておらず、最大 1500 人に限定している。先日この情報誌を作成している人と話したところ、現在 1450 人が定期購読しているという。購読数を限定しているのでその数を上限に食材を作ればいいことになる。これまでのビジネスではどのくらいの人を買ってくれるのか、はっきりしないまま作物を作ってきたが、食べる通信の方式なら購入者数があらかじめ揃った上で作物を作るという流れになる。

○私がアドバイザーをしている中伊豆・神代の湯では、1 週間 1 棟 10 万円で貸し出している。1 棟に 20 人宿泊できるので 1 人あたり 1 日約 700 円で宿泊できる計算になる。学生の合宿などでの利用が多いことから今年宿泊すると次年度の予約を優先的に受け付けるシステムを取っている。

一度利用すると翌年も利用してくれることが多く、1年間の予約を受け付けるとその後は何もする必要がないという話だった。伊豆市内でこうしたアイデアでの試みもある。

* 東北食べる通信 <http://taberu.me/tohoku/>

小長谷 ○成長戦略については、やはり「食える町」にしないといけないので、その点から考えると伊豆市には観光がある。観光についてあまりPRすると昔から住民の拒否反応があったが、地域の魅力とふれあう観光として開発することを提案したい。地域の美味しいものなど住民が自慢したいものを観光資源にする「地域いきいき、ふれあい型観光」で、地域づくり協議会にも匹敵するものだ。自分たちのまちをきれいにして国道に花を植える、花を植えるのは通った人に見せたいからで、八木沢地区でもヒマワリを国道沿いにたくさん植えると多くの人が写真を撮っていく。それで直接お金が落ちるわけではないが、このように地域のいいものを行政と一体となってPRして観光に結び付けていって、地域で生活できるようにすることだ。これが実現できれば現在抱えるさまざまな問題をクリアできるはずだ。座長が示した13億円を稼ぐためには外貨として伊豆市の外からのお金を稼がなければならない。ウルトラCではないので時間はかかるが、この方法で進めるのが最も確実なのではないかと私自身は考えている。



座長 ○観光業では、観光客が増えれば収益が上がって雇用が増えて年収が増加して財政が上向くという流れになる。これを実現するには5ヵ年計画を策定して目標を定めて、何で収益をあげるかをしっかりと把握しなくてはならない。それによって広報の方法も変えて担当も明確にしなければならない。曖昧なままで観光が重要だといっても結果が実感できない。毎年のように結果が感じられるようにすることで、13億円増やすために観光ではいくら増やさなければならないのか、こうした観点で考えなければならない。観光客の中でお金を落としていってくれるのが中国からの観光客だ。長期滞在型か、短期滞在型か、あるいはイベント型か、観光の形態についても再検討する必要がある。

○前回出たアイデアの中でいいと思ったのが、伊豆市をベッドタウンにする案だ。工場を誘致して収入を上げるよりも、他で稼いできて伊豆市に住んでもらって税金を納めてもらう、こうした考え方である。ベッドタウン化すれば子どもも増えるのでまちの景色も変わる。そのために重要なのは教育だ。静岡県で学力調査の結果が大きな話題になったが、伊豆市が学力調査で県下1位になればいい。小中学校の補助教員に元大学の先生などレベルの高い人に加わってもらう、こうした取組をしているところはないので注目を集めるかもしれない。伊豆市で数学を教える時にノーベル賞級の先生が教える、こうした取組が話題になれば教育が変わっていくだろう。

○観光ではイベントもある。おかみさん大会のような趣旨で、たとえば修善寺会議といったイベントを実現できないか。話題になっている「おもてなし」で会議を開催するのはどうか。修善寺はブランドなので文化芸術サミットといった会議も5年後くらいには開催できるのではないか。こうした会議が開催できればブランドもイメージも変化する。

長谷川 ○あまり大きな施設がないので大規模なイベントは難しいが、コンパクトな会議で宿泊を伴ったものならば対応できる。沼津に静岡県総合コンベンション施設ができたので、そこで開催されるイベントの参加者の一部に伊豆市に宿泊してもらおうといった連動方式がいいと思う。

座長 ○必要なのはお金なので、どうすればお金を落としてもらえるか、これについて考えてみる必要がある。修善寺の旅館についてみると、高級で高いのか、それとも庶民的で安いのか、どういった価格帯で設定しているのか。

長谷川 ○修善寺温泉に限ったことだが、現在、旅館組合には 18 軒の旅館が加盟している。18 軒は個性豊かで小さい施設から大規模な施設まであり、価格帯も 1 万円程度の小さい施設から 5 ～ 6 万円のところまである。組合加盟施設の平均単価は 1 泊で 2 万円弱で、旅行の目的や旅行者の人数構成によっていくつかの選択肢が用意されている。

○座長が指摘されたとおり、お寺の修禅寺のブランドは価値が非常に高い。ついでに宣伝すると、現在、山門の改修工事が終わったところで、これまで何百年もの間、指月殿に仮置されたままだった仁王像(金剛力士像二体)を現住職の強い要望を受けて山門の左右両側の設置が終わったところである。この仁王像は文化財の指定は受けていないが、少なくとも県の重要文化財に値すると上原仏教美術館の先生が見立てている。今後、住職の意向も伺いながら指定を受ける方向で進めていくことになるだろう。本尊(大日如来坐像)は国の重要文化財に指定されており、日本で唯一現存する重慶による木造作品でとても価値が高い。こうした歴史的な背景もあるので修善寺には文化的なセミナーのたねはいくらでもあるといえる。

座長 ○健康長寿やファルマ・バレーの関連からはどうか。また 2018 年の東京オリンピックとの関連でのサイクリングの話はその後どうなっているか。

市長 ○東京オリンピック関連ではいくつかの話題があるが、その中で最も大きいのがサイクルスポーツセンターのベロドロームがオリンピックの本会場になるかという話で、実現は難しそうだが、このくらい話題性のある施設であることは確かだ。東京からの距離などの面で本大会の開催はかなりハードルが高いが、事前合宿では相当数の利用があると考えている。

○1 年半後にあたるオリンピックの前の 2016 年のアジア大会のサイクルスポーツ競技のベロドローム開催は決定済みである。またオリンピックの前後には国民の運動熱が高まるので、こうした時期に伊豆半島全体でスポーツ集客がどのくらいできるか、市民の関心をどのくらい集めることができるか、これを見誤ってはいけなさと考えている。

座長 ○観光とともにスポーツも成長戦略の中にも含められる。オリンピック誘致が実現するかどうかはわからないが、市として前向きに取り組むといい。

○伊豆市の農業や製造業については、東京という巨大市場を念頭に置いた戦略を持つことだ。東京で売れるモノを作ることだ。国際化といった問題もなく、日本円で支払われるので為替リスクもない、また支払いも間違いないという利点がある。東京で何を売って儲けるかで考えればいい。やはりターゲットを東京に置いた戦略がカギだろう。

森嶋 ○私が関わっているものとして小中学生に手伝ってもらって伊豆市のフリーペーパーを作成する活動がある。この活動を通してわかったのが地元の人が地元を案外知らないことである。修善寺に住んでいても修善寺の旅館に泊まったことがないので、観光で来る人に対してその方にあった宿を紹介できない。ところがフリーペーパーを作成するにあたって子ども達がとても詳しく調べてきた。伊豆市について調べた内容について触れてもらう、子どもが発表できる場を設定すれば、母親や父親だけでなく祖父母も強い関心を持って聞いて伊豆市に対する理解を深めてくれるだろう。また子ども時代にこうした地域学習を通して市内各所を回れば、伊豆市について詳しい大人に成長する。今あるブランドは若い人にとっては上の世代が作り上げたもので、若い世代が魅力を感じにくいのは仕方がない部分もある。新たに若い世代をターゲットにするのであれば、子ども達が調べたものをブランド化すること。勉強している世代に体験と情報を集めることだ。東京の伊豆市観光ブースに子どもを实际連れて行ってPRしてもらう方法もある。



浅田 ○県内市町と市町村合併での伊豆市の類似団体として、前回澤野さんが説明してくれた時には同じような数字だと感じたが、本日いただいた資料を見ると土地に関する数字では課税できる土地の宅地割合では伊豆市は低く、市全体の面積の 2.6%しかない。会社であれば収益が小さくなれば規模を縮小することもできるが、財政規模が小さくなったからといって市の面積を減らすことはできない。その上、伊豆市では山林が市全体面積の 83%を占める。このうち私有林 53.6%と財産区林分が 1.9%で、税収に効果あるのはこの部分だ。残りの 44.5%は国有林、県有林、市有林で、ここからの税収は見込めない。この公有林が 13,340ha、伊豆市全体の 33.6%にも及ぶが、これを活用しない手はない。

○活用策としてまず県に引き取ってもらうことを考えたが、県が市に払い下げたいといった状況であり、国に寄付することも現実的ではない。市有林を 40 年サイクルで有効活用して木材を出荷するとすればどのくらいの収入が得られるか、具体的に検討してみた。市有林のうち人工林が 2,697ha で、この人工林の材積が 80 万立米である。これを 40 年で割ると年間 2 万立米になる。山にはいろいろな木があるが、これをすべて杉材と仮定して販売すると現在の市場価値で 4 億 6 千万円程度の収入が見込まれる。これをさらに市内で製品まで加工すると年間 12 億円程度の製品を生み出せる計算になる。私のこの計算が正しければ、現在活用されていない山から木材を出荷する、埋もれている財産を活用することを提言できる。

○「人づくりセッション」でも田足井さんが木を使うまちづくりや木を活用した子育てを提案していた。山をそのまま放置しておくのではなく、自然のよさを考えながら山を活用する、山を今一度見直して活用する方策を進めることを提案する。

座長 ○山林の活用は各地で進められている。活用方法の検討が必要だが、戦後、植林してから 50 年以上が経とうとしているので十分活用できる状態になっているはずだ。ここで学生の皆さんからコメントを頂戴したい。

武藤 ○子育てに関する意見が気になった。私が子どもの頃、母は専業主婦で家にいて兄弟 3 人を育てていたので、私自身、母親が仕事をしている間に子どもが抱くさみしさは知らない。しかし今思い返してみると、たとえば兄弟がいるので授業参観で授業が重なってしまうと母が私の授業を見ることができなかったことがあって、それだけで子どもとしては悲しかったことを記憶している。これが、母親が仕事をしているとなると、それだけで子どもはさみしい思いをするように思う。子どもとしては預けられることであまりいい思いをしない。先ほど指摘されたように土日祝日に母親が働けるようにするのはなく、私の意見では、職場が方針を変えたり、子どもが帰宅する時間帯には母親が自宅にいる方が子どもにとってはいいのではないか。

座長 ○家庭と保育について耳を傾けておくべき大切な考え方だ。ほかに未来づくりについてコメントはあるか。

石谷 ○伊豆市の強みについては市民の方がよく知っているはずなのに伊豆市の強みを市民が知らないという指摘があった。未来づくりをするには大人が伊豆市についてよく知らなくてはならない。大学生であっても自分たちで未来づくりを進めると考えたことはなく、こうしたことは大人が全てしてくれるもので自分たちは無関係だと思っていたが、子ども達にも理解してもらって自分たちで未来づくりをする、こうした視点も重要ではないか。

秋山 ○「明日の伊豆市を考える-論点資料」に階層別人口と労働力人口のグラフがあるが、少子高齢化の影響もあってか、年少人口や生産年齢人口はどんどん減少しているのに高齢人口は増加している。将来を担う若い人達が伊豆市から都心に移っていることも一因だと思うが、これに対して伊豆市に残っている親世代から、たとえば就職や結婚したら伊豆市に戻ってきたらといった話をするのもあるのか。

市長 ○厳しい質問だ。高校や大学の卒業をきっかけに人口が減ることは全国の地方都市が共通して抱える問題で、高等教育が基本的にないことから大学進学時に流出し、就職する時にも適当な就職先がないために首都圏などの都市部に転出していってしまう。冒頭で話した NHK の特集では、伊豆市のほかに高知県出身の女性を取り上げていたが、東京で学校の先生として働いているのに、生活していけないからといって夜の仕事もしている人がいるという。夜の仕事をするために東京へ行くのか、私はとても疑問だった。世界的にみれば産業構造は 1960～70 年代とは

まったく変わっているのに、産業構造が変わりきれなくて日本は停滞している。親世代の価値観で子どもを東京に出せばそれでいいと考えているようだが、このこと自体が大きな問題だ。

○東京の合計特殊出生率は 1.06 で、都道府県の中で出生率が突出して低いのが東京で、そのことが全国の出生率の平均値を押し下げている。これに対して伊豆市の大人達は「こんなところ(伊豆市)は住むところじゃない」「若いもんはどんどん東京へ行け」と言い続けていて、若年人口が減り続けている。これは全国的な傾向で



もあるが、大人のこうした価値観が人口減少を加速化しているともいえる。

○さらに伊豆市の場合では、30～39歳の結婚した世代が子育て時期に、伊豆の国市、三島市、沼津市に転出してしまうことが大きな問題だ。伊豆市で生まれ育って仕事もして生活しているのに、結婚して子どもができて大きくなって学校に上がる年代になると近隣の市町に転出してしまう。これは伊豆市が抱える大きな社会的、構造的な問題だ。こうした問題が重なって伊豆市で人口が減り続けているのが現実だ。

○もう一つ伊豆市の問題として農業が敬遠されることがある。これについて所得面からみると、一般に年収1千万円あれば高所得だといえるが、実は、世帯所得が2千万や3千万円のわさび農家はたくさんあり、年収1千万円以上の椎茸農家も多い。それなのに後継者がいない。伊豆半島でどのようにして生活していくか、この点についてもう少し掘り下げて考えていかななくてはならない。

座長 ○今の観点では私は静岡県の人人口問題についても検討してきたが、静岡県の場合は高校卒業する生徒の25%しか県内に残らない、残りは東京や大阪などへ行ってしまう。これが深刻な問題になっている。そして東京へ行って大学で勉強してもUターンで戻ってくるわけでもない。戻ってきてもらうには生活環境が良好であることが必要だが、大卒者に適した職業機会が少ないことも問題だ。農業の話題が出たが、静岡県内でも伊豆市内でも年収1千万円以上の農業従事者はたくさんいる。年収1千万円は大企業の部長クラスにあたるのに、こうした現状認識を持たないまま農家はつらいと考える人が多いのが実態だ。雨は降れば休み、定年は無いという利点も多いし、汚いと考える人もいるが、今の農業はきれいである。この点を強調しておきたい。

毛利 ○土日に入手が足りない、労働力が必要なのに働きたい人が働けない、人口減少も農業も少しずつよくなっていく。大学がないために一度は外に出たとしても戻ってくる。農業はそれほど低所得ではないことを子どもに伝えていく。こうした点で努力していけば30～40代が転出していなくなるのではないかと。

飯倉 ○伊豆市の主要産業は観光と農業なので、ここに若い人が参入できるようにすればいい。そのためには若者が職業体験できる機会をたくさん提供していくことだ。体験しないとその仕事のよさを実感することができない。

○静岡県の観光事務所は東京の有楽町にあって観光では東京がターゲットだ。ところが情報が氾濫している世の中なので営業マンが東京にいないと情報がターゲット層に届かない。そこで伊豆市の宣伝を徹底的にする人が東京に拠点を持つ必要がある。イズシカ井も伊豆市に来てから知って食べようというのではなく、伊豆市に来る前に知っている必要がある。来る前に買ってもらうことが商売の鉄則で、立ち並ぶ観光施設で迷いながら購入してもらうのではなく、そこに来る目的がその店で買うことにある、こうした戦略を立てる方が、モノが安定的に売れるようになる。東京での宣伝については熱海市が上手に展開する。熱海の手法から学ぶのもいいのではないかと。

座長 ○前回は指摘したが修善寺駅にはきわだって有名な名物がない。北海道なら白い恋人、静岡や浜松ならうなぎパイがある。全国的に有名な名物を伊豆市で作る努力を重ねることだ。



<休憩>

座長 これからいろいろなアイデアを発言いただきたい。委員以外に会場からも意見を頂戴したい。

飯倉 ○座長から提案された名物を作って修善寺駅で販売することに対してはさまざまな手法がある。たとえば、まちづくり株式会社、住民株式会社といった仕組みを作って、住民などがそこに投資して売上に対してリターンがある、こうした形にしてみんなが関われば売上も上がって関わり感も生まれる。第三セクターではないが、こうした新しい仕組みを作り上げることができれば人々の関心が上がってくることが期待できる。修善寺駅ではアイコンが一つ足りない。学生の皆さんもインパクトがないと考えているようなので、記念撮影する、誰もが写真を撮るようなアイコンを修善寺駅に新設するよう提案したい。

座長 ○市民が中心になる、市民が関心を持つ、これが必要条件だろう。そのためには市民に対するお裾わけが必要なので、市民株式会社や伊豆ファンドといったしくみが想定できる。伊豆市民ファンドならば1口1万円で資金を集めて5年後には償還する、その間、配当を払う、こういったしくみになる。財政法上クリアにしなくてはならない点もあるかもしれないが、NPOに依頼したり銀行に相談するなどして、こうしたしくみの可能性を検討するのもいいのではないかと。税金を使うことなく、まちの活性化を実現できる、さらに新しい雇用を生み出すことができれば、なお可能性が広がる。

○今日は教育長も参加しているのでご発言いただきたい。先ほどでたように日本一教育力が高い伊豆市、これを実現するために意見はあるか。

教育長 ○議会でも学力調査結果の公表についての質問があったが、伊豆市は市としても平均正答率は公表しないことを教育委員会として回答した。その一方で伊豆市の子ども達に欠けている点、もっと伸ばさなくてはいけない点を詳しく分析して判断して、各学校に返して学校でも分析して、子ども達の学力を高める、こうした考え方で一丸になってまとまっている。そのような中で伊豆市の教育委員会が日本一をどこに持っていくのか、市が関わるのは小中学校の義務教育で難しい問題もあるが、伊豆市の教育が直接関わる0～15歳までの中学卒業までに加えて、高校とは連携することで18歳までを含めて一貫性をもって教育を進めていきたい。幼稚園から中学校まで、

たとえばあいさつについて一貫する教育を進めていくと、15年経ったらどういったかたちで表現できるか、それをまとめている。他の人と出会った時に自らあいさつができる、こうしたことが全て自然にできれば、教育日本一の伊豆市といえるようになるだろう。学力面も当然あるが、特技、知恵、体のいずれかで活躍できる子どもが伊豆市から輩出される、こうした目標である。

○先ほど武藤さんから問題提起された問題については私自身も同意するところもある。家に帰っても親がいない「かぎっ子」と言われていた問題で、親が子育てできない状況に置かれてさみしい思いをしていた子ども達も含まれる。かぎっ子の問題を解消しなくてはならない時代も過去にはあった。これに対して最近では、親が子育てする環境を整えていこう、働きやすいようにしていこう、という動きに変わっている。しかし、親が働くことでさみしく思う子どもがいて、それが原因で転出していくことになるかもしれない。土日は両親とともに家庭で過ごす家庭教育と、かぎっ子の問題をどう上手く結びつけていくか、私自身、深く考えているところである。こうした感想を持った。

座長 ○教育問題はたいへん難しい問題で、特に今は難しい時期でもあって、教育長の発言は慎重だったように思う。学生などを活用して、もっと手をかけた新しい教育もできる。家庭だけでなく地域コミュニティが関わって良い子どもを育てる。何が一番いい教育かという定義が難しいので慎重な発言になったのだろう。

○吉田松陰が萩の出身だったように明治維新など昔、高名になった人を輩出してきたのは小さな町が多かった。小さな市町だからといってできないことはない。



金刺 ○本日提起された意見の中で私自身が強く賛同したのが、浅田さんが提案した林業や森の活性化だ。私も狩野川などで地域での関わりがあることから勉強したことがあるが、山が荒れると杉林の間引きをしないと下草が生えなくなって、土砂崩れの危険性がでて、川が汚れて海の環境まで悪化する、こうした流れがある。私は仕事で伊豆市内をくまなく回るが、山がたくさんあって、杉や檜の林や雑木林もあるが、手入れが行き届いているきれいな山が非常に少ないのが実感だ。今年2月に大雪が降った時には雪のために木が折れた山も多く、たくさんの被害があったように思う。間引きなどが上手くいっていないために木自体が成長していないために細い木が多く、雪の加重に耐えられなくて折れたのだろう。これからの台風シーズンに伊豆市に台風が接近して土砂災害に襲われる危険性もある。大雨が降った時には山から運ばれた土砂の影響があって狩野川が泥でひどく濁っている。保水力が高い強い山にするには木をある程度間引いて下草が成長できるようにしなければならない。林業の復活が急務であるといえる。

○聞いたところによると東南アジアなどの新興国では木材が不足しているとされる。昔、日本が建築ブームだった頃にこれらの国々から大量の木材を輸入したこともあって、現地では大きな木はほとんど伐採されてしまっていて、住宅建設を進めたい今になって新興国では良質な木材が少ないという問題があると聞く。伊豆市にはこれだけの木材の財産があるので、日本国内で流通させるだけでなく輸出も視野に入れて進められるのではないかと。人件費の面で国内で角材にまで仕上げると高額になるということであれば丸太のまま輸出する方法も検討に値する。細かい方法は今後検討するにしても、立地条件から考えて伊豆市の森や林業を活性化させて、若者の雇用も生み出していけるのではないかと。一口に森の手入れと言ってもかなりたいへんな手間がかかる仕

事でもあるので、子どもの時から山や川の役割について説明しておくことも大切だ。林業で実際に生活が成り立つという点も忘れてはならない。伊豆市には山林がとても多いので、宝の山だという発想に転換して財産を上手く活かしていく。大きな開発をするよりも、今ある木を活用する、このことから始めるのも一つの手ではないか。

長谷川 ○先ほど新宿からの高速バスの料金について片道2600円は安いという意見を学生の方から頂戴した。私もそのように考えている。圏央道が開通したことで北関東から圏央道と東名を經由して伊豆方面に来る所要時間が大幅に短縮されて環境も整った。しかしながら、そのことが十分に知れ渡っていない、北関東の旅行会社の担当者がお客様を伊豆半島に誘致するイメージができあがっていない実態がある。

○高速道路の利便性が上がったことを周知するために新宿から伊豆に入ってくる高速バスを有効活用する検討を進めている。同じようなバスが御殿場からも出ているが、こちらは毎回ほぼ満員の乗車率だ。特に夕方 17:05 頃に新宿を出発して御殿場に帰ってくる便は満席なのに、同じ時間帯に伊豆に来るバスは客がどうしても埋まらない。その時間帯に観光客が乗ることは考えにくいので、地元住民が活用していると考えられ、御殿場の人は新宿に買い物に行くのに高速バスを使って生活の足になっているようだ。長距離バスだけでなく市内のバスも含めて、生活の足としてのバスの活用について、もう一度考え直す必要がある。

○温泉場の域内の路線バスについてバス会社との話し合いも始めている。修善寺駅から出発して温泉場までの路線バスがあるが、このバスは温泉場の入り口のバス・ターミナルまでしか来ない。このターミナルを乗り越した先に市営駐車場が完成したので、今あるターミナルから奥の駐車場のところまでバス路線を伸ばせないか、相談している。これが実現すれば、温泉場の域内を循環するバスが運行され住民の足としても非常に便利になる、そして観光客にとっても温泉街を散策するのにバスに乗っても歩いてもいいので選択肢が増えて喜ばれるはずだ。特に住民については買い物難民の問題が深刻なので、車を運転しない方はタクシーを相乗りして買い物に行っている現状があって、この問題も解消することができる。住民と観光客の両方から喜ばれる交通手段としてのバス路線の再編について検討を進めている。

○新幹線利用は学生にとっては高いかもしれないが、時間を有効に使いたい社会人にとっては便利である。三島まで新幹線に来て、そこから伊豆箱根鉄道に乗車してきれいになった修善寺駅に気持ちよく到着できる。そこからバスやタクシーに乗り換えるこのルートは確立しているが、三島での新幹線から伊豆箱根鉄道への乗り換えアクセスが観光客にやさしくない、荷物を持った人に不便な連絡通路になっている。これを解消するために三島駅北口から修善寺までの路線バスを



一日 1-2 便でもいいので運行できないか。午後 2 時頃に東京から到着するひかり号に合わせて修善寺方面から三島に行き三島から戻ってくるバスができると、時間の短縮に加えて旅行会社へのセールス・トークとしてきわめて説得力やすいメリットがある。修善寺への行き方に関する質問では、何回も乗り換える、乗り継ぎが面倒だといった問題を説明する必要もなく答えやすいという大きな利点がある。実現するかどうかははっきりしないが、実験的にでもいいので実現したいと考えている。

○伊豆半島を訪れて2、3泊した時に何ができるか、観光客には各地を巡ってほしいという思いがある。先ほど学生の皆さんに伊豆での交通はどうしたかと質問したが、市が手配した車で移動してしまったので伊豆半島での移動について考える必要がなかったようだが、一般の観光客で路線バスを利用する人のために路線バスの乗り継ぎルート・マップを整備したいと考えている。観光バスは昔はあったようだが、今の状況で観光バスを復活できるところまでは難しいので、既存の路線バスでいいのでタイム・テーブルを示してモデル・コースを案内する、こうしたきめ細かい観光情報を提供していく事業活動を進めている。2-3泊する観光客がその間ずっと1か所に泊まるのではなく、山に1泊したら翌日は海で泊まる、あるいは修善寺温泉で1泊したら翌日は南や西に行き宿泊する、こうした伊豆半島を周遊するコース・プランを提案していく計画である。これを進めやすくするためにも既存の交通インフラを活用した整備が必要だ。

森嶋 ○持続可能な財政フレームの観点では次世代を持続可能にすることが重要だ。私が子どもの頃にはお金に関する勉強をしたことがなかったので、財政について知っているとはいえない状況があることを痛感した。お金の計算だけでなく、子どもの頃から世の中のお金のしくみについて知る必要があるだろう。私自身は自分の子どもにことあるごとに、これは何を稼いだお金がかかっているといった話をするようにしているが、お金のしくみについて子どもの頃から教えておきたい。伊豆に住むのであれば、平均このくらいの収入が必要で、東京ならこのくらいと説明して、そのためにはこのくらいの仕事をしなければならぬと伝えている。このように子どもの頃から世の中のお金のしくみについて伝えることも重要ではないか。財政の専門的な内容までは難しいかもしれないが、自分の収入と税金の関係であってもピンとこないもので、社会でお金が回るしくみについて子どもに説明していきたいと考えている。

座長 ○行政の人が一生懸命、財政の説明をしても一般の人には理解しにくい。地方交付税という新しい税金がまた徴収されるのか、と誤解を受けることも珍しくない。消費税と地方交付税の違いがよくわからない人もいる。財政フレームの話をして市民には難解なので、行政には、丁寧にわかりやすいよう市民目線で、市民にわかる言葉で説明していく努力が欠かせない。

浅田 ○以前に飯倉さんがITの関連で説明していたことから思い出したが、20年ほど前、中伊豆町時代にITのサテライト・オフィスを私から提案したことがあったが、ほかの提案は実現したのにこのサテライト・オフィスは唯一実現できなかった。先日、大きな会社からカスタマイズ・センターをこちらで探したいという話を受けたので大仁高校(伊豆の国市にある静岡県立高校で統合再編された)が空いていたことから誘ってみた。会社があまりにも大きすぎたことなどから実現はしなかったが、ITのサテライト・オフィスでは、東京に近くて、納品は1週間程度の出張で東京に行きやすい距離であればいいとのことで、日常的に開発を進めるのは伊豆市のように東京に比較的近い場所が適しているとのことだった。先日の職員研修会の席で伊豆市も政策的に外に向かって考えるようにとの話があったことから大仁高校を伊豆市で購入して活用する、これはかなり大胆な案かもしれないが、いずれは伊豆の国市との関係も変わっていくと思われるので、外に打って出る政策も含めて検討する、こうした方向で伊豆市が前に進んでいける、先を見据えながら考えていく必要があるのではないかと。

小長谷 ○修善寺駅の完成記念式典に参加し、その後に土肥観光協会のメンバーで修善寺温泉にそばを食べに行った。連休中だったので土肥も修善寺も旅館はどれも満員との話だった。修善寺と独鈷の湯を眺められる蕎麦屋を敢えて選んで昼食をとって見ていたところ、かなりの数の観光客が歩いていて、さすがに修善寺は整備されていて観光客も多くてすごいなあという感想だったことを報告させていただく。

○土肥特産市「ありがとう」は土肥旅館組合が経営している。一次、二次、三次産業を合同で事業を進めて地域の再生を目指すことを目的に開始した。1日の売上が約11万円あって、この売上げが伸びていることから売れることがわかって生産者も目の色が変わってきて一生懸命作物を作って店に並べるようになっていく。月に1回、地区ごとに会合を開催していて、旅館組合の人が農家から話を聞いて相互に交渉する。今年の花火大会は、昨年事故があったことから消防から警備員の増強を要請されたので、「ありがとう」のメンバーに声をかけたところ32名が喜んで警備に参加協力してくれた。「『ありがとう』で関わっているのだから、数十年ぶりに来たが花火大会はやはりすごいなあ。」という話をしていた。「ありがとう」で自分の生活に直接関わっているのだから、警備にも関心を持って協力してくれるようになったことがわかった。

○静岡県がまとめた「ふじのくに観光躍進基本計画(平成26年3月策定)」では、先ほども指摘したが「地域魅力ふれあい型観光の推進」を提唱している。この「地域魅力ふれあい型観光」で踏まえるべき留意点の一つに、「地元の人が誇りを持てる観光地づくりをするのであれば『売るのはまず地元から』」があって、地元が稼げるのが条件である。ボランティア的に考えがちなのもあるが、ボランティア的では頑張っている人を逆に疲弊させる。独立採算のレベルで実質的な事業展開ができることをゴールとして意識しながら進めなければせっかくの良い取組であっても続かなくなってしまう、こうしたことを痛感している。

*ふじのくに観光躍進基本計画

https://www2.pref.shizuoka.jp/all/file_download105700.nsf/pages/81214E0C98ECC02E49257CA900299DFB

座長 ○最後にアドバイザーとして澤野さん、お願いしたい。

澤野 ○伊豆市としての戦略を考えていく上で必要なさまざまなアイデアが出されたが、財政的な見地を忘れてはならないことを付け加えておく。現在取り組んでいる事業、これまで取り組んできた事業に、観光振興や子育て支援の新たな事業を上乗せ追加するとしたら、こうした新規の取組に対して必要な財源をどうするか、財政面での問題がある。固定資産税や入湯税で税の増収策もいくつか提案されたが、それほどの伸びは期待できない。日本全体の地方財政そのものが非常に厳しくなっている中で、お金が必要な新たな取組を始める



には、一方で支出を抑制したり削ったりしなければならない。先に飯倉さんが指摘したように「選択と集中」を徹底的に進めることが必要。このセッションの2つのテーマである「持続可能な財政フレーム」への対応が「成長戦略」を進める上での重要なキーワードである。

○本日配布された「テーマ検討シート」の中で示されている「広

域連携」と「コンパクト・シティ」について 1 点追加説明しておきたい。「地方創生」が話題になっている中で、そのキーワードになっているのが、「集約」と「ネットワーク」、そして「連携」の 3 つである。今後、観光振興をするにも子育て支援を拡大するにも、また、強みにより打って出るにしても弱みを補完するにしても、伊豆市一市だけでやっていくことは難しく、他の自治体との連携で進めた方が効果のあるものが多いように思う。他の自治体との連携強化を選択肢として考えていくことだ。総務省が進める地方中枢拠点都市圏構想や定住自立圏構想、国土交通省が先日発表した「国土のグランドデザイン 2050」でも、その基本は、機能の集約、拠点づくり、周辺地区とのネットワーク化にある。その場合、拠点となる地区だけがプラスになるのではなく、ネットワークでしっかりと各地域を補完していく必要がある。伊豆市域から外に出て、地域づくり圏域を広げていく中でどのように連携しネットワーク化していくか、これが国全体の戦略の方向性であると思う。伊豆市も他の自治体との広域的な連携を考えながら、コンパクト・タウン化による集約とネットワーク化をもってまちづくりを進めることを検討し、財政運営上の課題である施設の統合や見直しなどに当たって考えていく必要がある。

○もう一つの連携として市民、企業、大学、金融機関などの幅広い連携がある。連携をもとにして資金の調達方法を検討してまちづくりを進めていくことである。行政だけで取り組むのではなく、難しい面もあるが、こうした幅広い連携での取組が欠かせない。

* 総務省 地方中枢拠点都市圏構想推進要綱の制定

http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01gyosei03_02000024.html

* 総務省 地域力の創造・地方の再生 定住自立圏構想 http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/kenkyu/teizyu/

* 国土交通省「国土のグランドデザイン2050 ～対流促進型国土の形成～」

http://www.mlit.go.jp/kokudoseisaku/kokudoseisaku_tk3_000043.html

座長 ○とてもうまく締めくくっていただいた。未来を明るくするか暗くするかは、我々次第だということだ。お金を使わないで、できるだけ知恵を使う、方法を変えればお金を節約できて他に回せる。工夫することは楽しいことで伊豆市にはそれができる。本日はありがとうございました。

